

民も官もありゃしない

徳永光俊*

中島さんの寝息が聞こえてくる。スーハー。昨日も今日も、とれたたの野菜を肴に酒を飲みかわしながら、夜遅くまで農業論を語りあかし、疲れ果てた。丹波の山深い胡麻の里における、1996年7月18日から21日にかけての、農耕文化研究振興会とコスモファームの共催による「生き方としての農業を考える」シンポジウムでのこと。北から南から地元から、老いも若きも男も女も、農について考えようとする人たちが30人ほど寄り集まる。1泊2日では、「こんには、はいさようなら」で終わりだ。2

泊3日なら、「私はこう思う、いやオレは違うぞ」と、お互い意見を述べあうのがせいぜい。3泊4日、寝食ともにすれば、少々疲れも手伝ってお互いとろけはじめ、何かしら不思議な共感の輪が生まれてくる。考える世界から感じる世界へ。

中島さん曰く。鯉淵学園で若者たちを教えたり全国を回ったりする中で、就農に関する状況が全く変わってきていることを痛感する。農家の親が子に強制することは出来なくなり、子もハイソウデスカとは言わない。また、「東京卒業」というコピーに示されるように、土から離れたサラリーマンやOLたちが土（農）を求めはじめている。農業をめぐる世間の眼が変わりつつある。今こそ農のチャ

*とくなが みつとし，大阪経済大学経済学部

ンス！しかし、しかしだ。農業界は自分たちの実力で若者を引っ張り込もうと、どれだけの努力を払っているだろうか。人材をめぐる他産業と競争しているんだということを、どれだけ感じているか。悲愴感だけが先走って、「ボリュームとしての農業」を作りあげるチャンスを、みすみす逃がそうとしているのではないか。そんな中島さんの情熱を思い出しながら、これを書いている。

中島論文の詳細は略する。戦後50年を経て日本農業が転換期を迎え、ある意味ではチャンス到来の現在において、1950年代の民間農法の再評価は、われわれをどこへ導こうとするのか。細かい栽培技術の点などはよくわからないが、私の問題関心に引きつけていえば、中島さんの再評価の重点は、農民たちが作物との対話を深める中で、作物の生命力を引き出し、微生物や土の活力を生かしていく技術を生み出してきたところにあるというものである。この生物学的な循環思想こそが50年代民間農法の核であり、循環を断ち切り外部補給で置きかえようとする官による近代農法と最も対立するところであるという。

この論文においては言及されていないが、中島さんが他で書かれているように、生物学的な循環思想の再評価は、現在の有機農業や環境保全型農業の思想へとつながっていくことになる。逆に言えば、環境保全型農業とてぼっと突然出てきたり、外国の影響や官の指導によって生まれたものではなく、50年代の民間農法に

源流があるということだ。つまり農法の転換期には、民間農法、民間学としての在野農学が主導していくのだと、中島さんは暗に述べたいのではなからうか。

戦後の農法史について十分に考えたことがなく、外在的な批判にならざるをえないのを御了承いただきたい。私の調べてきた奈良盆地での近世から戦前までの農法展開のイメージをもとに、二点だけコメントさせて頂く。第一は、在地農法の展開の中での民間農法についてである。50年代民間農法は、具体的には育苗技術や施肥技術を中心に展開された。それは単なる偶然だったのか。

奈良盆地についてみれば、大和農法は〈基盤整備・土と水の土台づくり→多肥化・肥力づくり→深耕化・狭義の地力づくり〉という展開の法（のり）があった。たとえば、大正末期からの晩稲旭と西瓜・野菜との田畑輪換農法においては、〈耕地整理事業とバーチカルポンプの導入→硫酸など化学肥料の多投→高北式短床犁の導入〉といった具合である。戦後についても大まかにみれば、〈農地改革と吉野川分水→化学肥料と農薬の多投→機械化と有機質投入などによる土作り〉とくる。奈良盆地でも50年代に、さまざまな民間農法がためされていたことが、聞き取りして確認できている。つまり、民間農法が大いに展開するのは、主に品種や育苗・施肥など肥力づくりの栽培技術にかかわる局面においてなのである。理由は簡単で、元手あまりいらず、誰でもが気軽に試みることができ、マネもしやすいからである。基盤整備は、土地

制度ともかかわり村ぐるみで行なわれるのがふつうである。また、農具の導入は、品種の選択や苗の育て方、施肥法の工夫と違い、誰しもおいそれとはいかない。

これは、奈良盆地だけのことであろうか。嵐嘉一（『近世稲作技術史』）は、生態均衡系という考えにもとづき、西南暖地の稲作においては、乾田化→多肥化・晩稲化・薄播化という流れがあったことを指摘している。川田信一郎（『日本作物栽培論』）は、昭和30年代の増産期にみられた諸技術は、品種の選択・作物の管理・施肥・土壌環境の整備と改良の4本柱にまとめられるという。最後の土壌環境の整備と改良は、個人の力では行ないがたく、昭和20年代から30年代初頭にかけて政府が多額の費用をかけて行なった。つまり、大和農法で見られたことが、他の地域においても同様に見られたのではなからうか。民間農法も各々の地域における在地農法の展開の法の中に位置づけて見ていく必要がある。そうでなければ、60年代以降の民間農法の衰退の答えも、そして今後の展望も、見えてこないのではないか。でも、民間農法というポリュームとしての農業を再評価したいという中島さんの論文の趣旨からは、ややずれるかもしれませんね。

第二は、民と官との対立的図式についてである。近世における学者の農書と百姓の農書、近代の西洋式学理農法と老農たちの伝統農法、そして戦後における官製技術と民間農法。私たちの農法史は、いつも二項対立図式で理解されてきた。

農家とともに歩む農学、農家の幸福に資するための農学を旨とする「総合農学」の中で育った中島さんにとって、この図式は理解しやすいことだろう。だからこそ言う。

今後の展望を考える上で、はたしてこの対立的な視角は有効であろうか。今や民も官もあげて有機農業を言い、環境保全型農業を言う御時勢である。1991年の『総合農学』創刊100号記念の座談会において、中島さん自身が今の情勢においては、現場に学ぶ中から自ずと展望が開けてくるという現場主義では、もう持たないのではないかと述べておられる。新しい農業を模索するロマン、理念を総合農学会として現場の農民とともに探していく必要性を強調されているじゃないですか。総合農学会とて、現場農民からみれば「官」であろう。官にも様々な潮流がある。民がすべて「民間農法」一色でないことももちろんである。

二項対立図式は、メダルの裏と表の関係でしかない。各々の時代状況と各々の見方の立場に限界づけられた一方の過大評価は、他方の過少評価に落ち着かざるをえない。相手あっての私なのだ。何か敵を見つけないと不安におののいてしまう、男たちの農業史。そんなレフェリー（と錯覚）の立場で農業を客観視（できると幻想）する状況でないことは、中島さん自身がすでに先刻御承知のはずだ。民とか官とか、もうどうでもいいじゃないか。民であれ官であれ、民であり官であり、民でもなく官でもない、第3の道を探すことこそ、今の課題ではないのか。

埋もれてしまった民間農法の再発掘という地味な作業に取り組む中島さんだからこそ、敢えて言いたいのである。いや、すでにカンがいい中島さんなら気づいているかもしれない。中島さんの問題意識の根底にあるのは、戦後、ひいては近代日本の農学史の批判的検討であろう。1950年代には50年代の、70年代には70年代の視角があった。そして90年代は90年代のまなざしがあつてしかるべきである。民も官もありゃしない。

とするなら、現在の状況に応じた農法史をふり返る歴史的な視角とは、どういうものか。私の考えはごく平凡なもので、第一のコメントとも関連するが、地域に応じた「在地農法」の歴史的な展開の法を、地道に明らかにすることしかないのではないか。地域の農民たちは、官であれ民であれ「外来」の農法にふれることで、自分たちの農法を「在来」として意識し、都合のいいものなら何でも受け容れることで、「在地農法」を練り上げていくのである。「近くの神より遠くの神」。農法といっても、何かちゃんとした体系的なものを考えるのではなく、融通無礙なアメーバーみたいなイメージを持っておいたほうがいいのではなからうか。

自分たちの主張に都合いい地域の事例を全国から寄せ集めて、農業の未来展望を語る。そんな点と点をつなぎ合わせる手法は、もうすでに現実の農業によって死刑宣告されている。10年前、20年前、50年前の優良事例がその後どうなったか。一つの面としての広がりをもった地

域の農法の歩みを100年、200年と跡づけた研究がどれだけあるだろうか。「農は万年、亀のごとく」歩んでいるのである。

シンポジウムの最終日、4日間ともにすごした気持を語りあった。アーシンド。そして、シンポジウムを支えてくれたコスモスファームの若い人々や産直アグロス胡麻郷のやや若くないおばちゃんたちに感謝、ありがとう。若い一人がこともなげに言う。「農業って作ることだけか思ってたけど、前もっての準備やら後始末が大変。食事の用意もいる。農業って暮らしたんですね。」……別の若い人がおそろしいことを言う。「農業って藝術なんですね。」……「生き方としての農業を考える」というヘビー級（のつもり）の問題も、「ファッションとしての農を感じる」フライ級のパンチで一発KO！されてしまうのだ。

このシンポジウムの仕掛人の一人は橋本昭さん。丹波の山奥へ入植して26年。初めて収穫した稲穂を手にした時に射した秋の日の光が胸の中で今もなお残光として輝いているという。しかし、最近ふと思う。日吉町にまで押し寄せている住宅開発の波でここへやって来た人が、家庭菜園で初めて野菜を手にした時の日の光は、果たして違うものだろうか。同じお天道さまの恵みではないのか。

3泊4日をともしにして、中島さんとはもう10年来の友のような気持にさせてくれたシンポジウムであった。ありがたや。それに甘えて勝手なことを申しました。すいません。